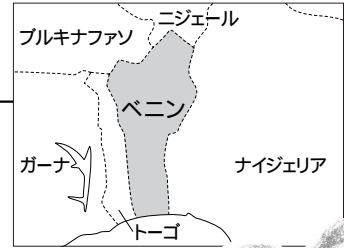
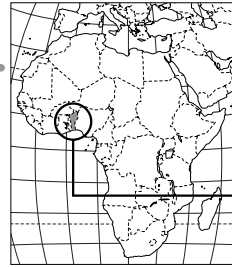


# ユニセフ子ども物語

## 地球に生きる子どものくらし

Republic of Benin

### ベニン共和国



## ロベールの長い旅



「ほら、そこのお前、のろのろしないできちんと働け！」男の大きな声がロベールの頭上に響きました。ロベールの住む村に男がやってきて、両親にお金を払ってロベールがこの採石場に連れてこられたのは3週間前のことでした。ロベールは学校に行きたかったのですが、お金がかかる、と学校の先生に言われたのです。

生活にあまりゆとりのないロベールの村では、子どもたちをよその国で働かせれば、その子が村に残るよりもいい生活を送ることができる、と信じている親が少なくありません。ロベールの両親も、親戚から話を聞いてロベールをよその国で働かせることにしたのです。両親と離れるのはとても辛かったのですが、自分のことを思ってくれている両親のために、ロベールは男についていきました。

採石場での仕事はとても厳しく、毎日朝早く起こされ、夜遅くまで働かされました。砂利を砂になるまで細かく砕くのですが、力がある上に小さな砂利が飛び散るので、顔にかすり傷ができることもよくありました。仕事が終わると倉庫の穀物を入れてある袋をベッドのかわりにして寝るのですが、寝心地も悪くぜんぜん疲れが取れません。ロベールと同じように連れてこれた子どもたちもみな疲れていて、ここに来てからどの子の笑顔も見たことがあり



ませんでした。子どもたちの仕事を見張っている男がたくさんいて、ときどき子どもたちをシャベルでたたきました。あまりの痛さに泣いた子がいましたが、「そんなに強くたたいていないだろう」と男はさらに力を入れてその子の肩が腫れてしまうまでたたき続けました。



ロベールが連れて行かれてからしばらくして、両親の住む村に役人とユニセフの人がやってきました。村の会でその人たちは子どもたちが外国で働くことはとても危険であり、決して子どものためにならないことをわかりやすく説明しました。また、商売を始めたい女性のためにお金を貸すことができることなどを話していきました。ロベールのお父さんもその会合に出席したのですが、ロベールがどんな仕事をしているのか、とても心配になってきました。お父さんは家に帰ると、お母さんに会合で聞いた話をしました。「外国でロベールを働かせることがあの子のためになるなんて、どうして考えたんだろう。私は間違っていた。きっとあの子は毎日朝早くから働かされて、くたくたになっていることだろう。ケガでもしていなければいいが。早く連れ戻してあげないといけないなあ」とお父

んはつぶやきました。数日後、お母さんはロベールを学校に行かせるお金を稼ぐために、グループを作って商売を始めることを思いつきました。そして近所の女性たちに話をしに出かけていきました。

ある時ロベールと数人の子どもたちは男に呼ばれ、車に乗せられました。「また別の場所に連れていかれるんだ。今度はどんな仕事なんだろう」ロベールは聞きたいのをじっと我慢していました。男が何をするか分からず恐ろしかったからです。

ロベールたちの乗った車が国境にさしかかりました。なかなか車が動き出しません。「どうしたのだろう？」とロベールたちが不思議に思っていると、おとなたちがやってきて、「これから保護センターに行くんだよ。もう君たちはつらい仕事をしなくてもすむからね」と言いました。そしてロベールたちを別の車で保護センターに案内してくれたのです。「君たちは村に帰れるようになるまで、しばらくここで生活するんだよ」と先ほどのおとなが言いました。「本当に僕、家に帰れるのかなあ？」と不安に思っていたロベールもじきにセンターでの生活になれました。ここでは食事が出るだけでなく、勉強も教えてもらえます。ロベールは早く村に帰って学校に通いたくなってきました。「いつになったら帰れるんだろう？」



センターに来てから1ヶ月ほどたったある日、ロベールはセンターの人に呼ばれました。「ロベール、君が家に帰れる日がきたよ。村ではよその国で子どもたちが働くことは危険なことだ、と思う人が増えてきたんだ。それに、君のお母さんは近所の女性たちと食料品店を始めて君の学費を準備しているんだよ。お父さんもお母さんもきっと君の帰りを楽しみに待っているはずだよ」



ロベールを乗せた車が乾いた大地を走っていきます。村まではあと1時間。「僕はやっと家に帰れるんだ。大好きなお父さんとお母さんに会えるし、学校にも通えるようになるんだ」嬉しさをいっぱいロベールの顔をアフリカの風がやさしくなでていきました。

(文・構成：日本ユニセフ協会)



およそ620万人の人口の55%を18歳未満の子どもが占めているベニン。この国でも子どもの人身売買が行われています。もともとアフリカでは子どもたちを裕福な家庭にあずける風習がありました。この風習から徒弟制度が形成されたのですが、この制度が国内や諸外国間の人身売買へと発展してしまっただけでなく、国境を多くの国と接していることもあり、ベニン国内での人身売買だけでなく、トーゴやマリ、ナイジェリア、ガボン、カメルーンといった諸外国に連れて行かれる子どもたちの人身売買の中継地点ともなっているのが現状です。

売られるのは4歳から15歳の子どもたちがほとんどです。学校に通っていない子が多く、家族が多く貧しいのが特徴です。親戚や知人から売買業者を紹介された親は、子どもたちがその後経済的な搾取や肉体的・性的な虐待を受けることも知らずに子どもの売りに応じてしまいます。子どもを手放すことで子どもたちにとってよりよい可能性が開けると考えているのです。国境を行き来する密輸業者が売りの仲介となって、子どもたちがガボン、コートジボワール、ナイジェリア、コンゴなどの外



©UNICEF / MAGGIE MURRAY-LEE

国に送り込まれることもあります。

いずれの場合にも子どもたちは物売りをしたり、性的産業で働かされたり、農場で雇われたり召使いとして働かされるのですが、貧しい地域の子もたちが収入の多い地域に売られている現実から考えると、子ども売りの一番の原因は貧困であると言えます。他にも、子どもたちが遭遇する危険を親が知らないことや、子どもを裕福な家庭に預けるという過去の習慣、監視の目が十分に行き届いていない国境などが要因として挙げられます。

では、売買の対象となる子どもたちはどう思っているのでしょうか？実は、外国に行くことを望んでいる子どもは少なくないのです。村を離れたいと思っている子どもたちは外国でさまざまなものを見たり、仕事を見つけたり、物質的な豊かさを求めるなど現在の自分たちの状況を少しでもよくすることを強く希望しているのです。しかし、実際に売られてしまうと、彼らは教育や保健のサービスを受けることができなくなってしまいます。



©UNICEF / 1993-18/WCARGO/PIROZZI

# 西・中部アフリカの人身売買

毎年20万人もの子どもたちが西・中部アフリカで売買されています。その売買にかかわっている国々としてベニン、コートジボワール、ガボン、ガーナ、マリ、ナイジェリアなどがあげられます。なぜこうした国々では子どもの売買が行われているのでしょうか。

## ●●● 子どもの売買を無くすために ●●●

子どもたちの売買をかつての徒弟制度とあまり変わらないと思込んでいる親たちに対するアドボカシー活動が、ユニセフとベニン政府の協力によって行われています。子どもを売買業者に渡してしまう親たちは、子どもたちに訪れる危険を理解していないのです。子どもたちの将来を思っている売りが子どもたちに危険をもたらすことになることを親たちが知らないと、売買をなくすことはできません。

ユニセフはテレビやラジオなどを通じて、子どもの売買がもたらす危険性についてより多くの人々に伝えていきます。例えばテレビでは、都市部に住む視聴者に子どもたちの経済的な搾取について訴えかけ、視聴者が番組終了後に匿名で子どもを搾取しているケースについて報告できるようにしています。地方にも比較的普及しているラジオは、売買された子どもを雇っている立場のおとなや、実際に子どもを売ってしまう親たちに対しても、子どもたちの売買・労働やその危険性について知らせる有効な手段となっています。

また、特に売買の対象になりやすい14歳未満の子どもたちが、村など地域のコミュニティから連れて行かれないように、地域で監視をしています。ユニセフの支援で現在270の村レベルの委員会が子どもの売買をなくすために作られました。村長や青年の代表、女性グルー



©UNICEF / MAGGIE MURRAY-LEE

プのリーダーなどで構成される委員会は、子どもの大量輸送などを監視し、定期的なミーティングを持って子どもたちが売買されないように活動をしています。

より多くの子どもたちが学校に通えるようにすることも子どもの売買をなくすためには欠かせません。学校や先生たちは子どもたちにとって重要な情報源です。売買による労働や危険について子どもたちに話し、子どもが家で親に伝えることで子どもたちを労働のために売り渡すことを思いとどまらせることができます。ユニセフはNGOと協力しながら、こうした活動の中心となる地域の指導者や学校の先生たちのトレーニングをしています。



©UNICEF / 1993-14/WCARGO/PIROZZI

貧困が大きな原因ともなっているため、ユニセフは少額融資プログラムを行っています。この少額融資プログラムによって家庭の収入が向上し、子どもたちの学校に通うチャンスを増やすことができます。学校に通えば子どもたちは売買の危険についての知識を得ることができます。昔の習慣や文化的な価値観なども関連しているため、子どもの売買をなくすことは簡単なことではありませんが、ユニセフは政府やNGOと協力しながらこの問題を解決するための活動を続けています。

(参考文献：“Project to reinforce the fight against child trafficking in Benin” by UNICEF April 2001)

